



岩田洗心館 珈琲茶会 第2回

2016年

4月17日 (日曜日)

午後1時30分

書齋カフェ

初座1時間 後座(懇親会)1時間
会費500円(入館料を含む)

■ 本日のcofFee

いつもの銘柄

■ 本日の茶菓子

夏目漱石の病、暴力

アウトサイダー・アート

■ 茶菓子提供者

三頭谷鷹史 (美術評論家)

三頭谷鷹史 略歴

1967年愛知県犬山市生まれ。同志社大学卒、美術評論家連盟会員。1970年代は美術、写真、演劇、パフォーミングなどのジャンル横断的な表現活動をおこなった。80年代以降は美術批評を中心に活動し、現代美術や現代いけばなの展覧会も多数企画。著書に『前衛いけばなの時代』(美学出版)、『宿命の画天使たち 山下清・沼祐一・他』(美学出版)。共著に『日本美術全集 第一』(平凡社)、『日本の20世紀芸術』(平凡社)、『美術の日本近現代史』(東京美術)などがある。

■ 茶菓子解説

あんなに怖いなら、そしてあんなにお母様をひどい目に合わせるなら、いっそお父様なんか死んでしまった方が …………… 筆子(漱石の長女)

偉大な文学者として知られ、人格者としても評価の高いのが夏目漱石である。権力や権威に媚びない、痛快な人物でもあった。それなのに子供たちは父漱石をひたすら恐れた。それは漱石によるDV(家庭内暴力)が原因なのである。—— 精神病に起因する、悲しい暴力であった。

夏目漱石(『漱石写真帖』より)

漱石の精神病(ただし、うつ病説もある)については、彼の死後、ある程度知られるようになった。ただ精神を病んでいたことが知られても文豪漱石の名が汚れる事態にはならなかった。病としての狂気と芸術的狂気との親和性が緩衝となって、漱石を不名誉から守ったのである。しかしDVとなるとそうはいかない。漱石のDVを知り、家族の恐怖を知ってしまうと、私たちが漠と抱えていた漱石像が大きく揺らぐことになる。

また、こんな面もある。漱石は精神病の発作を起こした時、さかんに絵を描いた。山水画風の絵などが現存しているが、それよりも前に描かれたという絵がたいへん興味深い。鏡子夫人によると「現実とは飛びはなれた浮き世ばなれ」したものばかりで、妙ちくりんな絵だったという。この辺り、どうもアウトサイダー・アートの匂いがするのである。今回の珈琲茶会では、誰もが知っているようで知らなかった漱石にアプローチを試みよう。